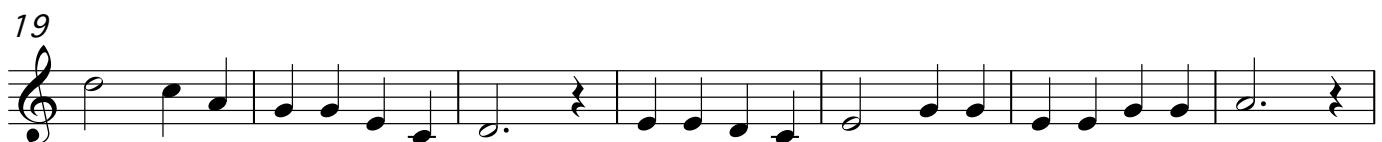
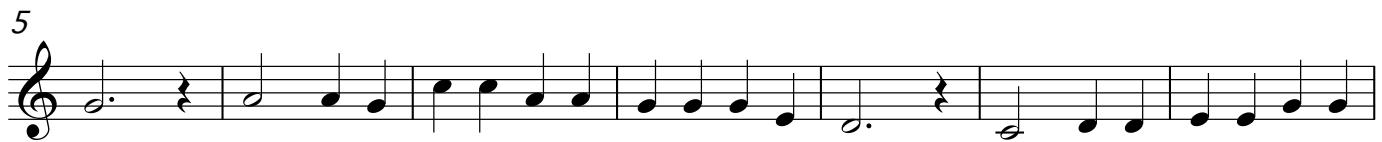
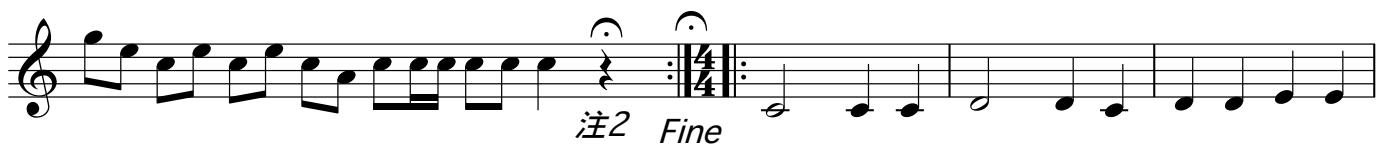


『月琴樂曲自在』より「黃金行進曲」

山本 茉輝(21-206030)



26

30

D. C.

歌詞は本譜面では省略した。

拍子について

原譜は工尺譜で書かれており、拍子が示されていない。しかし本譜面では、前半部を拍子なし、後半部を4分の4拍子として記譜することとした。理由は、原譜は意図的に拍子を書いていないのではなく、記譜法が拍子という概念を欠いているとみなし、明らかに4拍子系の音楽として書かれている後半については、五線譜という拍子概念を含む記譜法に翻訳するうえで4拍子で書いたほうがよいと判断したからである。ただし後半部が「4拍子系の音楽として書かれている」ことを判断することが当時の編者や演奏者にとってどれほど当たり前であったかは定かではない。そうした意味で後半部も無拍子で書き表すことは一定の意味があるとは思われるが、ここでは作曲技法の観点から(後半部は明らかに西洋的な4拍子、西洋的なフレージングを意識して作曲されているであろう)、4分の4拍子として記述した。

前半部にかんしてもフレーズのかたまりは見出すことができるものの、自由なパッセージの連続であり、確固とした拍子感はないため、無拍子で書き表すこととした。

連桁について

原譜の凡例を参考する限り、原譜においては音符の桁の連結については注意を向けられていない。本譜面では、原譜が漢字の集合で書かれている単位については連桁で表すこととした。ただし、付点4分音符と8分音符の連結など、五線譜上で表せないものについては分離した。

注1: ここの「c a」の2音については、「付点4分音符+8分音符」か「付点8分音符+16分音符」か、原譜の印刷乱れの影響で定かではない。音楽的にもどちらかが決定的とは断定できない。

注2: ここの休符は音価が指定されていない。前半部の終結部であるため、誤植ではないと判断し、休符上にフェルマータ記号を付した。

注3: ここの休符も音価が指定されていない。ここは後半部を大きく2つに分けたときの前半の終わりであるため、誤植ではないと判断し、休符上にフェルマータ記号を付した。
ただし後半部の最後の休符には音価が示されていることを考えると、ここが誤植である可能性は否定できない。